

2018年
初夏号
第 195 号

飛鳥

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人 永野 正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話 088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp



春霞 たなびく山の 桜花
見れどもあかぬ
君にもあるかな

紀友則

いろいろかいろ ③	安藝真一	2
キルギスタンからコンニチハ ⑦	氏原名美	3
新聞余話⑥	大澤重人	4
おのころじま奮染記 13	田島征彦	5
出版文化賞受賞余話		6
飛鳥の新しい仲間たち		7
わが家の太郎 ⑫	永野雅子	8

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

いろは がいろ

その二十二

花つづり

安藝眞一

さくら、もう散り終えた頃か。

日本で一番の開花宣言をした高知市は、瞬間に桜色に染まり、呼応するように四国中が開花したかと報ずると海を越え、南に北に烽火連なるごとく花ひらく報らせが列島を駆けめぐる日々。仕掛花火の点火の連鎖が続くように、あちらこちらの山里が桜色に染め上がる。桜のない県は一つとしてなく境界もなく咲きつづける花の嵐の便りをきくたびに、まことこの国は桜の島なりと思いかえす。

桜吹雪の四月が過ぎれば初夏の陽気となるが、五月中はの知床半島で桜に出会ったのは、もう六十年も前のことか。霞か雲かと咲き匂う本州の桜とは装いを別にした

北国の桜は静かに咲く。一つ二つと数え上げる七分咲きの花卉は、まだ残雪の残る山々を背に、ほのかな紅を押し上げる様に、言葉少なく咲く風情がいじらしい。足元の水芭蕉の白さを眺めながら、ゆつくりと北の海まで六月まで咲きつづけるつもりか。

散り終えた本州の桜の名所も、半月近く騒ぎつづけられたためか、花失せた日々も、興奮のざわめきが、ほんのりと花色に染まって見えない雲のように揺れている。

福島の瀧桜はどんなだったろうか。岐阜の薄墨桜の幹をさわって見たかった。京都洛北の花々、高知の中越家のしだれ桜……各地名代の桜が目に見えて来る。

まだ見ぬ桜は吉野の奥の千本だが、耳で聞くだけで行った事がない山であるけれど、もうすで見えた事のある思いのあるは、歌舞伎の「京鹿子娘道成寺」。舞台は吉野でなく道成寺だから紀州という事になるが、もう十数回、くり返えして観たこの舞踊の背景は紀州というよりは吉野山と映るのである。歌舞伎座の舞台の横長のスクリーンのような広大な書き割りがそうさせるのだと思うが、白拍子が舞い続ける所作事に呼応するよ

うに、左へ右へと揺れるような野山の景色は、そのまま吉野の奥の千本を踏み歩いているような心持がうつとりと続き、終盤の鐘入りとなって、はたと紀州の山かと思えるような見物をしているのである。むしろ「義経千本桜」の方が正に吉野であるけれど、桜の書き割りがあっても、花の風情にとほしく、やはり桜は道成寺となる思いがある。いずれにせよ歌舞伎の出し物には桜が多い。

さくら、桜の連なりに、気をとられて、しばらく見ていなかった庭を、ふと振り返ると、ウバメガシの樹の間に、とろりと藤の花房が垂れている。薄むらさきのグラデーションをひろげた花容は思いの外に大きく、見入る内に又も一つの花容が押し出すように迫り合い、更にもう一つ、向うの枝にしなだれかかる藤の花。いつの間にかめくれた季節に、今にして、去っていった桜のうしろ姿に気がついていく。

藤が咲けばツツジも満開か、つづいて山の頂きには石楠花のひらく気配。どの花々も桜のように開花宣言などは与えられないのに、いずれも物言わぬ静かな開花である。テレビ・ニュースは、さくら、

桜と東北へ、北へと開花を追って、果てしないが、その間に藤は寡黙に咲いて、やがて婉然と満開の時を迎え、桜の終りを宣言する。ツツジの紅い群落にしてもしかり、もう向うには夏が見えてくるのだ。以前に出逢った名句がある。

「薔薇の樹に薔薇の花 咲く

なにごとの不思議なけれど」作者は高知在住。自然の妙なる調べを語りつくして、その不思議に胸をつかれた一句。みじかい言葉で平易に自然の力を云い放ったこの句におどろいた。

かえり見れば、この句はどの花々にも当てはめられて妙。定番の桜にしても、年中枯木の如く立ちすくんだ十ヶ月余の零落から、一転、春風と共に満開となる絢爛はまこと不思議なけれど不思議。藤の花にしてもツツジにしても

はては野の雑草の花々にも、同じ分量でこの不思議は満ち溢れている。しかも、どの花々も時を得て物いわぬまま不思議を見せて連なっていく。それぞれが散り終えたとやがて風が吹き、ゆつくりと季節がめくられて新しい不思議に合う。



キルギスの日本人—ある家族の歴史

氏 原 名 美

うじはら・なみ

高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

日本は春のお彼岸、中央アジアではノールーズの祭典で賑わう頃、毎年キルギス全国日本語弁論大会が開催される。日本語を学ぶものにとっては一大イベントだ。学内の代表選考会の段階から大いに盛り上がる。大学代表は四枠しかない。国内大会の次は中央アジア大会だ。今年はウズベキスタンが開催担当国でも二十二回目となる。

弁論大会は、日本語教育の伝統行事なのだ。

準備は、まずスピーチのテーマを決めることから始まる。テーマが決まると、いよいよ原稿を書き始めるのだが、手紙ではなく何でも電話で済ませる文化の中で育った学生たちは、母語でさえ作文が苦手だ。最初は「こんなことがありました。楽しかったです」としか書けない。そんな、いつどこで何があったかだけの報告文を前に、世間話も挟みながらの面談を繰り返すうち、学生は出来事や体験を客観的に分析するようになる。そして、少しずつ自分の思いを日本語の言葉にしていく。

学内選考会には二十人がエントリーした。身振り手振りも交えて十九人が発表できたのに、やむを得ない事情で欠席した学生がいた。「です・ます」調で易しい語句と表現からなる幻となったスピーチの大筋は、少し脚色してみたらこんなエッセーになる。

祖父は、まだほんの赤ん坊だったころ中央アジアにやって来た。それまでは一家で中国東北地方の

村で暮らしていた。ある日突然、村にソ連の兵隊がやってきた。畑に出ていた村人は全員一か所に集められ無理やり貨車に乗せられた。たまたま外にいた曾祖母も背中に負った我が子と二人だけ、家族と引き離されて遠く離れたキルギスまで連れてこられたのだ。

祖父の名前は「タハラ・マンシュウ」だったが、キルギスに着いてからユガイ・ドミートリと名付けられた。朝鮮系ソ連人として登録されたのだが、祖父は母親からずっと自分たちは日本人だと聞かされて育った。姉が二人いたのを覚えてる。ハナコとミナコという名前だった。

父親の名前は聞いたかもしれないが、もう思い出すことはできない。家族が日本のどこ出身かもわからない。しかし祖父は、姉も父親もきつと無事に故郷に帰ることができたと信じている。そして、「タハラ・マンシュウ」がキルギスにしていることを祖国の親戚にどうにかして伝えたいと思っている。尋ね人の番組で有名なロシアのテレビ局に日本の家族を探してくれと頼んだこともある。祖父は、自

分が知らない日本のことを今でも思いつづけている。

私は、日本語と出会う前は日本のことばにも文化にもぜんぜん興味がなかった。ところが、日本語を勉強し始めてからは、日本の歌を聞いていると、意味はよくわからないのに温かい気持ちになってくるから不思議だ。私のルーツはニッポン、私は日系キルギス人なのだ。

日本国大使館に「幻のスピーチ」のことを知らせたところ、タハラ・マンシュウ氏に直接会って話を聞いてくれることになった。



タハラ・マンシュウ氏の孫
リー・クリスチーナ
(ビシケク人文大学東洋国際関係学部4年)

介護福祉士を目指す若いインドネシア人2人が、福祉施設で研修を始めた様子を毎日新聞紙面(弊社のサイトで読めます)で紹介したところ、施設の担当者から後日、2人が懸命に働き続けていること、関西の民放が密着取材をしているとの連絡がありました。

マスコミ的には必ず追いかけるべき話ではないのに、ニュース性を感じたのでしょうか。2人は技能実習生ではありませんが、介護分野での外国人の技能実習が始まるタイミングでもあります。自分が関心を持ったことが他のマスコミでも取り上げられることはうれしいものです。そんな話を若い友人にしたら、「必ず追いかけるものとは何ですか」と尋ねられました。

特ダネという言葉はご存知だと思います。他の社が報じていないことを掲載・放送するニュースのことです。冒頭の研修生の話もそういう意味では特ダネです。ただ大切な話ではあっても、記事を読んだ人がえっと驚く話でも、誰もが注目していた出来事でもありません。一方で、インパクトが大き

大澤 重人

新聞余話 ⑥



抜かれたら

い大事件の新展開や行政の不祥事、著名人の計報などの場合は、すぐに追いかける必要があります。

★ ★

遠くで何かが呼んでいる。「プルプルプル……」。一向にやまない。電話だ。睡眠の国から身体を引きはがして、支局の泊まりベッド脇の受話器に手を伸ばす。

「抜かれとるぞ。容疑者逮捕するつて。裏を取って夕刊で追いかけてくれ」

ガチャン。本社デスクの罵声で一気に目が覚めた。スマホで時間を見ると「02:35」。神経に触るFAXの受信音が鳴り、抜かれ紙面が吐き出されてくる。他紙の社会面トップ。「女子大生殺害容疑知人の男逮捕へ」。黒ベタの5段見出しが目刺さる。

午前7時、県警官舎前。今朝はとりわけ肌寒い。コート襟を立てて手袋をはめた手をこすり合わせながら、捜査1課長が出てくるの

を待つ。庁舎内では難攻不落の難物も、ここでは口を開くこともある。白髪交じりの髪を丁寧になでつけた1課長がドアから出てくる。「おはようございます。コロナの件で……」

駐車場へ向かう1課長を早速で追いながら幾つもの質問をぶつけても、うんともすんとも言わない。いきなり足を止めたと思ったら

「目が赤いな」

「あつ、泊まり明けで」

「書くんなら社の判断で書いたら良いんじゃないか」

1課長は次の質問をさえぎるように車に乗り込んだ。頭を下げて見送る。ゴーサインだった。

★ ★

大阪本社では全国紙各社が印刷直後の最終版を交換する慣例があり、宅配より前に抜かれがわかります。支局の泊まり明け記者も、起きてすぐに全紙の朝刊チェックをします。交換のない地方紙を含め、NHKの午前7時のニュースも見逃せません。警察は通常、逮捕後でないと正式発表はしないので、抜かれたら涙ぐましい努力をして裏取りに走ります。正直言うと執筆意欲が一番湧かない記事かもしれません。デスクからは「抜



ある日の支局に届いた各紙朝刊。ざっと目を通し、抜かれないかチェックします。

き返せ」と厳しい発破をかけられます。私の場合、目立たなくても、自分の感度に響くものに光を当て、記事を書きたいと考えています。それでも、他社が書いていない話なら、ちよつぱり燃えます。

おおざわ・しげと
毎日新聞大津支局兼地方部エリア編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。著書に『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』第26回高知出版学術賞特別賞受賞 など。

(5) かわら版

絵本コンクールの応募作品は二百冊を超えた。あんまり宣伝していないように心配していたのだったが、インターネットのコンクール募集サイトとやらで見て、沖縄から北海道までこんなにも多数の人たちが、オムライスの絵本を送ってきたのだ。

世間が絵本を、どう理解しているかが分かって愕然とした。駄菓子屋のオマケのようなものが大半だった。制作を中断して見なければならぬのは苦痛だ。

日高村は清流「仁淀川」の村だし、土佐の川といえばエンコウがいなければならぬ。一冊だけエンコウが登場するものがあったが、エンコウはカップですと断りながら、タイトルはカップパになっていた。エンコウを絵に描いて、その上に何故カップと断る必要がある。いかにも子供に教えようと、子どもを見下したものも多かった。それでも、少し面白いものがあり入選作品を決めることができた。

おのころじま 大奮 染木記

ふんせんき

田島征彦

13. オムライス街道 絵本コンクール②



土佐の日高村ならではの絵本が欲しかった。しかし、下手な絵で、文章も、まずかったけど、心に突きささる一冊を見付けた。

「山の上のポルコさん」

山の上にあるほら穴に住む年老いた猪・ポルコさんに、村で大騒ぎの「オムライス祭」の知らせがこない。設営の済んだ祭りの会場で夜中に暴れて、無茶苦茶にこわしてしまった。村の青年たちは会場をきれいに直して、この祭りの意味や由来を聞くため村の長老のポルコさんを訪ねる。ポルコさんは留守で、家には第一回オムライス祭の記念写真が飾ってある。そこにはポルコさんを中心に数名の年老いた仲間が写っていた。ポルコさんは、暴れて会場をこわした自身を恥じて旅に出ようと、村の無人駅で汽車を待っていた。(ここは映画の山田洋次監督の「寅さん」を彷彿とさせる)村一番のcockのおいしいオムライスでもてなして、ポルコさんと、その仲間の心を癒やそうとする青年たちの姿が美しく描けていると良いのだが。この絵本の作者が、たまたま日高村役場臨時職員だったので「オムライス絵本コンクール」事務局のYさんに問い合わせると、彼は多くの絵本を全部揃えてくれている青年だった。Yさんも「じごくのそうべえ」だけで、ばくを評価して審査員に選んだわけではなかった。六月二十二日午後から、表彰式とばくの講演会が用意されているので、日高村でポルコさんの絵本の作者、臨時職員さんと会ってみたいものだ。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

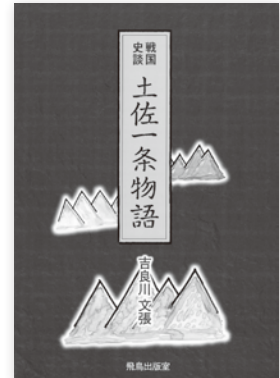
大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。最新作『のら大ボン』が人気。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

第62回高知県出版文化賞受賞

「戦国史談 土佐一条物語」 —— 雑学余話

吉良川 文張



ご承知の通り、土佐は古くから傑出した人物（偉人）を各界に送り出し「日本の歴史」をおもしろく彩ってきた。

この貧しい土佐で、なぜあんなにも多くの偉人を輩出できたのか——年金生活をしながらそんなことをぼんやり考えていた。ふと、余所者が集まっていた土佐の国と関係があるのではないかと思うようになった。

「土佐日記」の時代（平安後期）、土佐の国領・荘園の管理などは多くの余所者・長宗我部氏などの武士を国人として使ったと史料にある。また都人（貴族）の罪人の流刑地は土佐であつたし、「壇ノ浦の戦い」では平家武士の落人の多くが隠遁地にしたと伝わる。さらに土佐西南の中村には一条教房が公家集団を連れて移住している。あの長い戦国が終わると、城主となった山内一豊が遠州掛川から多くの家臣や職人を連れて土佐に入国した——荒野の土佐に高い教養とプライドを身につけた多くの余所者の智将・技術者たちが定住して「土佐の国」をつくったことが読み取れる。

想像するに、荒野での余所者たちの「郷での生活」は、小競り合いや暴力沙

汰、罵り合い、境界トラブル、家庭内の生活苦による離婚沙汰は日常的であつたと思われる。これが「いごっそう」「はちきん」「もがりの議論好き」等の土佐人氣質を育んできたように思う。

優秀な血をひく余所者たちの厳しい日常は「自立と負けず嫌い」の因子を養ったようだ。だから貧しくても「教育だけは」とする親心、優秀な子は「みんなで育てる」としたおらんく自慢の風土、これが独特の文化も育てたと思う——この風土・文化が優秀な土佐人を輩出する源になったと考えたのである。

いまその郷が崩壊を始めている。

私はこんな夢想話に酔って戦国時代に頭を突っ込んでしまった。余所者の因子を持つ戦国大名たちの盛衰を追っているうち幡多中村の公家大名・一条兼定と土佐統一をめざす長宗我部元親との攻防が目止まり、この結末をどうしても上梓したくなってしまう。

五年の歳月をかけて脱稿したが、途中、新史料の発見もあつて全面的な書き直しとなり「飛鳥出版室」の中内さんには無理難題をお願いした。深謝したい。



2017年6月入社
印刷部
氏原 章貴

この度、飛鳥で働く事になった氏原 章貴と申します。

会社の雰囲気も良く、とてもやり甲斐があり、飛鳥の仲間になって良かったと思っています。

趣味はバスケットで、今、一般でやってます。

去年はあまり勝利出来なかったのですが、今年は去年以上の勝利をと、練習に励んでいます。体を動かす事が好きなので、最近は夜ウォーキングをして汗を流してますが、体重がなかなか落ちてくれません(汗)

最後になりますが、憶える事もいっぱいありますが、一日も早く皆さまのお役に立てるように頑張っていきたいと思いますので宜しくお願い致します。



2016年12月入社
制作部
林 誠司

一昨年の12月8日に入社しました。林と申します。

新人の紹介には少し遅い気がしますが、このようなごあいさつをする機会がなかなかなかった為、遅くなってしまいました。

前職では紙媒体を中心としたチラシ等のデザイン・制作を担当していました。飛鳥に入社してからは紙媒体にデザインするという点では同じなのですが、紙の種類や、出版物等のルールなど、まだまだ勉強しなければならぬ事がたくさんあり、日々勉強に励んでいます。

また今後、webや動画などさまざまなメディアの需要が今よりももっと増えてくると考えています。新しいメディアへの対応も念頭におき、頑張っていきたいと思いますので、みなさまどうぞ宜しくお願いいたします。

飛鳥の新しい仲間たち



2017年12月入社
印刷部
益井 裕也

3ヶ月の試用期間を経て、今年の3月から正社員となりました益井裕也と申します。株式会社飛鳥に印刷オペレータとして入社しました。

以前は医療機器のカスタマーエンジニアをしており、高知、岡山、愛媛を飛び回っていました。

趣味はアニメ鑑賞や料理を作る事で、スポーツは大学時代にフットサルをしていました。

印刷の仕事は未経験の仕事ではありますが、1日でも早く役に立てようがんばりたいと思いますので、ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。



2017年10月入社
制作部
福留 啓輔

造園設計に始まり、デザイン・印刷・看板と渡り歩いて知識とスキルは広く浅くムダに付いてきたカンジですが(^ ^ ; ;

それでもこの業界、日々の流行・技術の進歩等がどんどん進んで、勉強してついて行くのもナカナカ大変。生きるための「仕事」と割り切ってしまう。ええ、もっとラクな仕事はいくらでもありそうなモンですが…それでも何とか踏みとどまっているのは「何かを作る」ことが「好き」な性分からかな？と。また、お客さんから「良かった」と言われれば「またがんばろう」と思える達成感が次へのやる気につながる。(これは何の仕事でもそうかな？)要は、自分が「楽しい」と思える仕事をして生きて行きたい。そのための理想の職場を求めて、ここ飛鳥にやってきました。履歴書の職歴の欄もそろそろ一杯になってきたので、こころでソロソロ落ちつきたいなあ…今のトコ、とても楽しく仕事させてもらってます(^ ^)v

わが家の太郎

42

衣替え

永野 雅子



雪、♪犬はよろこび戸とはなりません

快適(と私は思うのだが)な寝床を置いてスッキリとした。

ところが何が気に入らないのか、寝床の端をくわえて移動させたあと、庭に出たまま入って来ない。夜もふだんは見向きもしない外の小屋。

夜中に「ワン、ワン」と大きな声に驚いて出てみると、野良猫に向かって吠えている。

それが毎晩続いた。ご近所にも申し訳ないし、とうとう部屋に閉じ込めて鍵を掛けた。

そうなる今度はハン

ガーストライキ。皿の中の一口ほどを食べて、あとは残したまま。

いつか夫の友人が「あいつは妙



わが道を行く!

なところではいちがい(いごつそう)やつたけど、太郎はよう似いちゅうねえ」

と言ったことがあったけれど、恐れ入る。

でも考えて見れば、もうすぐ十三歳になる太郎が、そこまで自己主張できるということは元氣な証拠かもしれない。二日ほど食べなくても散歩の時はぐんぐんリードを引っ張って歩くと、機嫌が直ったあとの食欲ときたら、おから料理の追加をせがんで、「ウー、ワン、まだ聞こえんか」とばかり吠え立てる。

太郎との生活も、あとの位かと思うと、一日一日がかけがえのない日々に見える。

私もまだ現役、足腰に痛みがくることはあるが、パソコン相手に仕事もできている。

先日、パソコンのことで息子に質問をすると、メールが来た。答えの後に



「何でも聞いて来るのではなく、自分で勉強する気になってくたさい」

ああ、そうですか。わかりました。それは私を老人扱いすることなく、若さを維持するための有り難い言葉と受け取りましょう。

そう言えばそのセリフ、昔あなた達が小さかった頃、私がよく発した言葉でした。

太郎共々、元氣に過ごすためには、少しくらい意地っ張りも必要よね。そだね、太郎。